

伝承会報

第二号 平成二十年四月一日発行

編集発行 鈴木伸昌

今回の文章は河野家に残された河野先生真筆の原稿である。内容から見て、自衛隊内部の広報か何かに寄稿なされた文章と思われる。当該広報をお持ちの方は是非ご一報下されたくお願い申し上げます。

日本精神ト日本刀ト八不可分ノモノ

居合と日本刀ノ存在ニ依テ発生シタモノ

日本刀 劔ツルギ 日本ノ銚 二就テ考ヘテ見度イ

古事記 日本書紀ニ依レバ

一、天地未ダ分レザル時 天ツ神 天ノ浮橋ニ立チ 天の沼銚ヲ以テ

大海原ヲカキ 剣先カラ滴リ落チタ滴ニ依テ 日本国創生

二、須佐鳴尊 出雲簸の川上 兇族八俣ヲロチ族ヲ討テ 天のムラク

モの神劔ヲ得 之ヲ天照大神ニ奉ツタ 後 日本武尊ヲ・テ

天の草薙劔八 皇位の証アサシ三種の神器ノ一トシテ 熱田神宮ニ祭

祀

三、劔道の神 武御雷。布津主神 出雲国譲ノ神事ニ際シ 出雲ノ 稻

佐の小浜ニ 劔ヲ立テ、勇武ヲ示サレタ

四、神武天皇御東征の砌 大和俱舍衛坂ノ一戦ニ 利非ヲズ 海路ヲ

熊野灘ニ進ミ 二色浜（那智瀧の下）ニ上陸 天照大神の高倉下

によるの御劔 布都の御魂御劔ノ威徳ニ依テ兇族ニ色登部ヲ

討チ 陸路 大和平野ニ 長脛彦ヲ討チ 都ヲ定ム

ニギハヤヒ尊 × 妹ウマシマデ尊

此の 布都御魂御劔八 大和上神宮ノ御神体トシテ鎮座

五、此ノ神代 上代ノ銚。劔。八真劔 又八屈刀 テアツタガ

次第二馬上戦ノ時代トナリ實戦ノ必要上長クナリ、反リヲ生ジタ
事ガ、平親王ト号シタ平将門の天慶の乱（一・〇三〇年前）ノ記録
ニ見ユル

天文 弘治 永祿 元龜 天正ノ所謂ル戦国時代ハ馬上戦 徒歩

戦 相半バシ 徳川時代以降漸次徒歩戦ガ主体トナツタ關係上

刀モ短ク（二尺三寸定寸）ナリ 現在の形態ト成ツタト考ヘラレ

ル

六、如斯ク銚 劔 刀ノ使用ハ勿論堂上貴族ト武士ノ間ニ使用サレタ

ガ 鎌倉時代から徳川時代ニ至ツテハ 一般の商人 村落ノ豪士

等の間ニ 比較的自由ニ ソノ護身のタメニ 盛ニ 使用帯刀サ

レタ 事ハ 記録ニ 示ストコロ

如斯ク見テ来ル時 我ガ日本は劔の威徳ニ依テ創生シ 我ガ日本

民族ハ 日本刀ト不可分ナ 数千年の長イ歴史ヲ有シ 之二依ツテ日本民族精神即チ大和魂が培ハレタモノデ 日本刀ハ 我が大和魂ノ象徴デアリ 我が日本ニ 日本刀ノ消滅セザル限り 日本刀ヲ以ツテサレル所ノ 我が居合ハ 永久不滅デアル事ヲ信ジテ疑ワヌモノデアル

然し乍 近代科学ノ進歩ニ依リ 飛行機ノ出現ニ依リ戦闘形態モ地上戦カラ アナタ方ノ御専門デアル空中戦ニ移行シ 而カモS30年 76才ノ生涯ヲトジタ化学者 アインシュタイン 相對性原理ニ導カレタ 質量ハエネルギーと同じ ト云フ原理ノ技術科 即チ例バ 10キログラムノ物質ヲ完全ニエネルギーニカヘルト三五〇〇万トンノ良質ノ五石炭(日本年産、五〇〇万屯)ヲ燃烧シタ時ニ生ズル熱量ト同一ノエネルギーが發生スルト云事デアルガ 一アインシュタインアインシュタイン 第二次大戦ノ中期ニ 之ヲ基トシテ 原爆ノ開発ヲ当局ニ奨メテ 所謂ル 一マンハツタン計画ニ依リ 二十億ドルト延十三万人ヲ動員シウランニ三五の分離 然ノ工場活動ニ依リ 遂にS207.16 にチ 午前5時30分 一ニューメキシコノサバクの鉄塔ニ於テ 此ノ実験ニ成功シ ソノ21日目 8月6日広島、9日ニ長崎 兵器トシテノ最初ノ原爆が投下サレ 非戦闘員三〇万人ノ生命ヲ奪ツテ 終戦ノ因トナシタ事ハ 一ご承知ノ通 尚 核兵器ノナイキ トカ ミサイル トカノ發明ヤ 時速二四、〇〇〇キロノ大陸間弾道弾ニ依テ 八、〇〇〇キロノ敵地ヲワヅカ 二〇分間ニシテ 爆破スルト云フ様ナ 洵ニ戦慄スベキ化学ノ目ザマシキ進歩デアルガ如何 如何ニ化学ガ発達シ 新イ兵器が創造サルルモ 之等スベテノ兵器ヲ使フモノハ 人間デ

アリ 結局ハ 人間個々ノ 魂ノ練成ト云フ 事ガ最後ノ重要ナ問題トナツテ 参ルノデアリマス。

ソノ個々ノ魂ノ修養道八種々数フルニ暇が無イ 即チ 武道、神道、佛道、茶道、華道、等アラユル道ニ依ツテ 個々ノ明德ヲ究尽練磨スル事が可能デアリ 幸ヒ 私共 御互ハ 此の大和魂ノ象徴デアル日本刀ニ依ル居合道精進ニ依テ ソノ目的ヲ果ス事ノ出来ル事ヲ信ジテ 疑ワヌモノデ有マス。

次ニ 居合ノ本義ト申シマスカ 修養の眼目ニ就テ考ヘ見度イ。居合モ劔道デアリマスガ 一劔ヲ相互抜キ合セテ相對スル竹刀劔道ニ對シテ 一私ハ 佞想ノ敵ニ帯刀ノ佞對スルコノ居合ヲ真劔道ト唱ヘマス。

次ニ居合ノ本義ト申シマスカ修養の眼目ニ就テ考ヘテ見度イ 居合モ劔道デアリマスガ 一劔ヲ相互抜キ合セテ相對スル竹刀劔道ニ對シテ 一私ハ佞想ノ敵ニ帯刀ノ保持スルコノ居合ヲ真劔道ト唱ヘマス

抜刀シテ相對スル劔道の勝機ニ、三先ト云フ教ヘガアル 即チ先々先 後ノ先デアリ 未ダ形ニ現レナイ所ノ敵機(氣)ヲ討ツ先々ノ先ヲ最モ重要トサレテ居ルガ身ヲ守ル武道デアル居合ニハ 先々先ノ業ハ無イノデ 飽ク迄モ帯刀ノ姿勢カラ発スル所謂ル受ケテ立ツ所ノ刀法デ 一肥前平戸藩主 松浦静山公ノ 常静子劔談ニハ此ノ事ヲ

居合ハ刀ヲ抜ク事ニ非ズ 敵ノ心機ニ応ジテ 発勝スル神氣ヲ云フ トアル様ニ此ノ方カラ仕掛ケルト云フもので無ク 飽ク迄モ身ヲ

守リ心ヲ治メル刀法ニアル

古人ノ金言ノ如ク

居合は心術也

テ 流儀ノ掟ニ依ル刀法ニ依テ 敵前に自己を究明する 刀の上に 自己の精神を シミジミトソシヤクスル と云フ事が、究極ノ目的ニアリ 居合道ノ本義ト心得モノデアリ かく有てこそ 人間道トシテ 吾々ノ日々ノ生活ニ通ズル 無限ノ道ト云ヒ得ル モノト信ズルモノデアル

以上 断片的ニ申上タ事ハ 私ガ 之ニ達シテ居ルト云フノデ無ク 唯平常左様ニ考ヘテ修養ニ心掛テ居ルト云フ点デアツテ 皆様ト共々ニ 此ノ道縁ヲ喜ビ 清ク 正敷ク 楽敷ク ソシテ今 此ノ時ヲ真剣ニ 道ヲ行ジタイト念ジテ止マナイ者デアリマス

鬼一法眼 一八九〇 二二八〇 五五〇

和

孫子兵法 百戦百勝不非善之善 不戦而屈人之兵善之善

修養上の心構へ

二、百錬の上、掟ヲ体得シ 之ヲ忘レテ自分ノモノヲ作ル

一、最初 教ヘラレタモノヲ最後迄墨守スル心構へ

三、修養途上 他ノ上長ノ 意見ニ 迷ハサレヌ

之ダト云フ自分ノモノヲ 身ニツケル

先年 越前永平寺ニ 熊沢泰禅 主ノ

佛教典 獅子欺カザルノ力

毅然トシテ不動力 ウルワシキ徳の力 兼備ユル

道元禅師

眼 横鼻 直認得 モウダマサレヌゾ

真如月 教師ハ 月方向ヲ指示ス 指ノ役

真如の月ヲ 八自分自身

一系乱れぬ自然体 心の安定 気力の充實

居合神社ト林崎甚助重信先生

林崎居合神社 山形県北村山郡大倉村林崎 今ノ村山市

祭神 伊 弉 尊 素盞鳴尊

平城天皇 前

大同 二 一、一六〇前 同村 石城嶽(813m) 中腹ニ大明神沢

永 九二〇 楯岡林崎 林前寺 明神 熊野神社ノ草創

平安 二 六七〇 林崎明神ノ記録の最初

永 一 平安ニ この間の250年 コノ間ニ林崎明神が楯岡に

鎮座

天文十六 四一八 楯岡城主最上家ノ臣 浅野数馬が坂上

弘治 二 四〇九 民治丸 主膳ニ暗殺サル 民治丸 六才

永 二 四〇六 抜刀流の奥義ヲ悟リ 讐討ニ出立ス (桶狭

永 二 四〇六 抜刀流の奥義ヲ悟リ 讐討ニ出立ス (桶狭

永 二 四〇六 抜刀流の奥義ヲ悟リ 讐討ニ出立ス (桶狭

〃 間ノ合戦) 一八才

〃 四 主膳ヲ討ツ(丹波街道?) 二十才

〃 五 母 菅野 死 孤剣旅に出る(千早振る神の

勲我受けて萬代迄も伝へ残さむ)

以後 二七才の時、上杉家の勇将 松田尾張守二仕官 後不詳

(立膝) (正座) 享保ノ頃 七代長谷川英信先生

長谷川流 大森流 無双直伝英信流

正座 九代 林六太夫守正ノ剣道師大森六郎左右工門ガ

真影流古流五本の形カラ創案ス

近世の名人 中山博道先生 S八年まで 長谷川英信流

S九年以降 無想神伝流抜刀術

ト唱ヘラレタ

森本免久身 中山博通

正統 十五代谷村龜之丞 十六代五藤正亮 十七代大江正路

傍系 下村茂市 行宗貞義 曾田虎彦

細川義昌 中山博通

御承知の如く 居合も剣道である 唯だ 現代行はるゝ所の

スポーツ竹刀剣道と異なる所は 竹刀剣道は 抜刀して敵に対する
剣道で 最初から相手を仆す目的 云いかへると 侵略的剣技で
あるが 居合は全く敵を作らず 帯刀の姿勢に於て急変に即応す
る刀法で飽迄も受けて立つ 自営の為めの 剣道で 皆様方
の自衛隊の意義と全く同一で 侵略の目的のもので無く 飽迄も
一朝事ある時 自主防衛の為めのもので 此の目的を完遂するた
めには、植民地的憲法と云はるる現憲法を即座に改良して 日本
独自の体制を自由に強化する事が必要と全様に 居合い 独坐百
錬 その帯刀したる体勢に於て 満を持して 敵(突如として起
るべき)に一歩もオクレをとらぬ心積こそ 居合の本義と考へる
もの也

居合は真剣を以つてする武道 日本刀と不離一体

後醍醐 後村上天皇

北畠親房 神皇正統記

三種神器

正直 鏡 日の体 一物もたくわえず

私心なくして

萬象を照す(是非 姿現れず

と云う事無く其姿に従ひて感応

する徳とす)

之正直の本源也

慈悲 玉 月の精 柔和善順を徳とす 慈悲の本源也
智恵 劔 星の気 剛利決断を徳とす 智恵の本源也